占領期札幌におけるキャンプ・クロフォードの建設経緯とその特徴について

A HISTORICAL STUDY ON CONSTRUCTION PROCESS AND ITS FEATURES
OF CAMP CRAWFORD ON GHQ'S OCCUPIED DAY IN SAPPORO角 哲^{*1}, 大場 修^{*2}, 砂本文彦^{*3},
玉田浩之^{*4}, 村上 しほり^{*5}, 長田城治^{*6}Satoru KAKU, Osamu OBA, Fumihiko SUNAMOTO,
Hiroyuki TAMADA, Shihori MURAKAMI and Joji OSADA

This paper's purpose is to clarify the construction process and the following features of Camp Crawford in Makomanai, Sapporo. First, the GHQ recognized the importance of the camp in the Cold War. Therefore, its construction was of high priority thus completed quickly. Second, contractors organized a special union which is reminiscent of the JV. Third, the camp's DH and TH areas were developed simultaneously, as a result, was evaluated as "too expensive." However, it had numerous facilities. Furthermore, existing buildings and roads were used with new buildings made simple. Lastly, it is the foundation of the present suburban residential area.

keywords: After World War II, Hokkaido Prefecture, Sapporo, GHQ, occupied, Camp Crawford

戦後, 北海道, 札幌市, 連合軍総司令部, 占領, キャンプ・クロフォード

1. はじめに

本稿は、占領期の札幌で豊平町真駒内（現札幌市南区真駒内）に建設された占領軍基地「キャンプ・クロフォード」（Camp Crawford）の建設経緯と特徴を明らかにすることを目的とする¹⁾。

調達庁の『占領軍調達史』^{2,3)}が記す様に、占領期の日本では全国各地に占領軍基地が建設された。占領軍基地は、宿营地として進駐間もなく建設された兵士用の「かまぼこ兵舎」（Quonset hut）が中心のもの、1946年3月6日の占領軍の要求を受けて新設された家族住宅（Dependent Housing:DH）が中心のものに大別され、特に戦災を受けた占領施策上重要な拠点都市に多く建設される傾向にある。東京のワシントン・ハイツ（現代々木公園）はDHの代表例である^{注1)}。

占領軍基地に関する建築・都市分野の成果の一つに小泉和子ら^{注2)}の論考があり、占領軍設計部門がまとめた2冊の“Dependents Housing Japan & Korea”^{4,5)}（以下、“DH”）の分析を通じて、DHに戦後日本における住宅や住宅地の原点を見出した。この成果は、占領期日本の建築や都市を理解する上で、占領軍基地が見逃すことのできない対象であることを示している。

とはいえ、調達庁や小泉らの成果は、占領軍基地の建設方針や東京の事例を知る上で有効であるが、地方の情報は限られる。もちろん、占領軍は連合国軍総司令部（General Headquarter:GHQ）を筆頭に組織立てられていたから、日本の占領拠点である東京の様相を把握することで、地方についても一定程度理解できるだろう。しかし、都市毎に占領施策の重要度や戦災状況、都市ストックは異なり、その

一端は建築や都市という実空間に反映されたと想像される。よって、占領期日本の建築や都市の実態を把握する手がかりの一つとして、地方の占領軍基地について明らかにすることは有効であると考えられる。

こうした背景から、筆者らは東京と横浜を除く地方の占領軍基地や接収施設に関する報告^{注3)}や論考⁶⁾を公表してきた。特に、占領期日本の部隊配置と基地建設に関する論考⁷⁾では、全国の基地の設置状況を明らかにしたが、個別事例の研究は課題として残した。

本稿が札幌市を対象とした理由は2つある。まず、当初東日本を管轄する第8軍の拠点であった札幌市は、西日本を管轄する第6軍の拠点であった京都市と同じ非戦災都市であるため、戦前の都市ストックが遺存する都市という点で他の主要都市と異なることである。また、所謂6大都市に数えられる京都市に対し、札幌市は地方かつ積雪寒冷地という点で異なることである。

北海道の占領軍基地の中で、札幌市近郊真駒内の北海道立種畜場（以下、種畜場）と千歳村（現千歳市）の旧日本海軍航空基地を接収して新設された2カ所は、『占領軍調達史』がDHの新設予定地とする重要な拠点であった。この内、前者は1946年5月から翌年にかけて建設され、1880年に小樽・手宮＝札幌の鉄道を敷設したアメリカ人技師の名を冠して「キャンプ・クロフォード」と名付けられた。

キャンプ・クロフォードについては、『北海道米軍太平記』⁸⁾や『新札幌市史』⁹⁾等の郷土史、喜田信代らの現存兵舎^{注4)}や石川洋介らの北海道立種畜場施設を転用した基地内の施設^{注5)}、筆者らの札幌市の接収施設といった建築・都市分野の研究報告等が触れている。中でも、

*1 名古屋市立大学大学院芸術工学研究科 准教授・博士(工学)

*2 京都府立大学大学院生命環境学研究所 教授・工博

*3 神戸女子大学家政学部 教授・博士(工学)

*4 大手前大学メディア・芸術学部 准教授・博士(学術)

*5 大阪市立大学大学院生活科学研究科 客員研究員・博士(学術)

*6 郡山女子大学家政学部 講師・博士(工学)

Assoc. Prof., Graduate School of Design and Architecture, Nagoya City Univ., Ph.D.
Prof., Faculty of Life and Environmental Sciences, Kyoto Prefectural Univ., Dr.Eng.
Prof., Faculty of Home Economics, Kobe Women's Univ., Dr.Eng.
Assoc. Prof., Faculty of Media and Arts, Otemae Univ., Ph.D.
Visiting Researcher, Graduate School of Human Life Science, Osaka City Univ., Ph.D.
Lect., Dept. of Human Life Studies, Koriyama Women's Univ., Dr.Eng.

北海道庁の技術職員で建築責任者としてキャンプ・クロフォード建設に従事した廣田基彦の『開拓使・道庁営繕 80 年の覚書き』¹⁰⁾ は、関連資料や郷土史を精査し、自らの経験を加えてまとめた成果として見逃せない。しかし、いずれの成果も同時代の動向との比較が十分ではなく、その特徴の把握には検討の余地が残されている。

研究の方法として、本稿では『北海道米軍太平記』や『新札幌市史』、『新北海道史』¹¹⁾ から占領期札幌の基本情報を把握した。また、北海道立文書館の『長官事務引継書』¹²⁻¹³⁾ や真駒内の接收関連資料¹⁴⁾ で接收から解除までの様相を、外務省外交史料館の設営関係文書¹⁵⁻¹⁶⁾、『占領軍調達史』，“DH” から全国の動向を把握した。さらに、札幌市公文書館の 2 葉の配置図^{注 6-7)} や国土地理院の空中写真^{注 8)} から施設配置を、米国国立公文書館（National Archives and Records Administration:NARA）の写真^{注 9)} から施設の把握を試みた。この他、神奈川県立川崎図書館で建設業の会社史^{注 10)} や業界史を閲覧し、建設に与した企業の情報も得た。

本稿は 6 章からなり、2 章で全国での占領軍基地設置とキャンプ・クロフォードの用地選定、3 章で建設組織と工事、4 章で施設配置、5 章で建築について整理し、6 章で総合的に考察した。なお、本稿では『新札幌市史』等の郷土史の記述に従い、真駒内の占領軍基地を「キャンプ・クロフォード」、また、特に区別が必要な場合を除き占領施策を遂行した軍隊を一括して「占領軍」と表記した。さらに、引用文の旧字は新字に改めた他、圏点は全て引用者による。

2. 全国でのキャンプ建設の動向と真駒内の選定

本章では、『占領軍調達史』²⁻³⁾ から占領軍基地建設の全国的な動向を概括し、『開拓使・道庁営繕 80 年の覚書き』¹⁰⁾ や真駒内の接收関連資料¹⁴⁾ 等から、用地選定の背景を検討する。なお、キャンプ・クロフォードの用地接收から解除までの関連情報を Table 1 に示した。

2.1. 全国および北海道における占領軍基地建設の動向

まず『占領軍調達史』³⁾ から DH 建設に関する全国の動向を摘記すると、占領軍は 1946 年 1 月の非公式の予告に続き、3 月 6 日に 2 万戸（国内 16,000 戸）の建設を覚書として日本政府に指令した。占領軍は 2 月に家族の日本入国を許可していたから、この指令はその住居の充足を背景としたものと思われる。

DH 建設は第 8 軍が指揮し、彼らは 1946 年 4 月 1 日の軍内指令「家族住宅に関する件」を示した。また、第 8 軍は 5 月 11 日に「家族住宅計画一般仕様書」、7 月 15 日に「日本および朝鮮における家族住宅建設標準」（太平洋米軍総司令部）も示した。そして、各地の建設担当部隊は「地理的条件を勘案して DH 建設計画を作成」し、アイケルバーガー（R.L.Eichelberger）中將を司令官とする第 8 軍司令部の承認を得ることとなった。なお、アイケルバーガー中將は、DH の建設戸数や標準設計を GHQ と協議、決定する責任者であった。

一方、日本政府は占領軍の要求に対し、1946 年 3 月 15 日に「連合軍用宿舎等建設要綱」を示し「連合軍用宿舎建設に関する連絡機構に関する件」を閣議決定した。そして戦災復興院に連合軍将士用家屋建設中央委員会を吸収、強化した特別建設委員会を設けた。また、3 月 20 日に戦災復興院に特別建設部、4 月 20 日に地方機関として仙台、横浜、京都、呉に特別建設出張所を設置し²⁾、北海道は東北 6 県や茨城、千葉、山梨、長野、新潟等と共に仙台出張所の管轄となった。さらに、関係都道府県には地方特別建設委員会と特別建築課（部）

Table 1 Time table for Construction of DH and Camp Crawford

year	mm.dd	event
1945	11	[OA] requisitioned two stables of Hokkaido animal husbandary experimental station Makomai
1946	1	[OA] preliminary announcement for order of DH's construction (unofficially)
	2	[OA] permit of entrance into Japan for famiries of occupation army
	3.6	[OA] order of DH's construction (total planning number: 20,000 houses)
	3.15	[JG] "guideline for construction of DH et al. for occupation army" [JG] established special construction comittee
	3.20	[JG] established special construction department of war reconstruction agency
	4.1	[8th army] "The matter about DH"
	4.20	[JG] established blanch office of special construction department (Sendai, Yokohama, Kyoto and Kure)
	4.29	[JG] "The matter about contractors' selection of DH"
	5.1	[OA] requisitioned some facilities of Hokkaido animal husbandary experimental station Makomai
	5.9	[OA] the notice about requisition for Hokkaido animal husbandary experimental station Makomai
	5.11	[8th army] "specification sheet for DH plan" [OA] requisitioned land of Hokkaido animal husbandary experimental station Makomai
	5.13	[JG] "The matter about design drawings of DH for occupation army"
	5.18	[OA] reduce planning number of DH for 10,000
	5.19	[HG] established special construction office of civil engeneering section
	6.3	[HG] the official date of construction work starting
	7.1	[OA] the first change of DH's heating system
	7.15	[USAFPAC] "design standard of DH in Japan and Korea"
	9.20	[OA] the second change of DH's heating system
1947	5.26	[OA] the Makomanai's inspection by vice-admiral Eichelberger
	5.31	[HG] the initial target date of completion
	10.1	[OA] opening of school in DH area
1950	6.25	[OA] Korean war started
1951	9.8	[JG] sealing of peace treaty
1952	4.28	[JG] effectuation of peace treaty
1953	7.27	[OA] suspended Korean war
1955	3.31	[OA] derequisitioning started
1959	12.14	[OA] completion of derequisitioning

table notes

OA: occupation army, JG: Japanese government, HG: Hokkaido government

USAFPAC: United States army forces pacific

Bold: concern with Camp Crawford

が設置された。その後、5 月 13 日に戦災復興院特別建設部建設課が「進駐軍用家族住宅設計図に関する件」を配布した。この結果、占領軍基地の建設は都道府県の担当となった。なお、当初は DH 建設を戦災復興院、兵舎と接收住宅の維持管理を終戦連絡中央事務局になったが、10 月から戦災復興院に一元化された^{注 11)}。

次に北海道の動向で、4 月中旬までに戦災復興院特別建設部建築課が非公式に GHQ の情報を得て全国の DH 建設戸数を推計し、北海道は真駒内 463 戸、千歳村 166 戸とされた²⁾。千歳が選ばれたのは占領軍が航空拠点として重視した為と思われ、実際にアイケルバーガー中將らが視察等で用いた。但し、真駒内は仙台を司令部に、八戸、神町、多賀城、松島を管轄した第 8 軍第 9 軍団第 11 空挺団の基地であったが⁷⁾、千歳は旧日本海軍航空基地用地とし^{注 12)}、名古屋、立川、ジョンソン（埼玉県）、鹿屋、三沢等 12 か所の航空基地の一つであった。つまり、同じ地域でも管轄が異なる点に注意が必要である。

キャンプ・クロフォードの建設は、1946 年 5 月 9 日「進駐軍司令官より真駒内畜産試験場を兵舎及宿舎として接收することに決せる旨不取敢口頭を以て通知」を経て、5 月 11 日に種畜場約 635,250 坪が接收されたことに始まる¹⁴⁾。種畜場は道立の為、用地の大半は道有地であるが、東を走る定山溪鉄道、西の真駒内神社や民有地との境界は資料によって異なり、接收範囲が変更したと判断できる。但し、主要施設の接收は 5 月 1 日であるし、1945 年 11 月以降に厩舎 2 棟が接收されていた。また、用地接收後も占領軍を補助する職員が官舎を用いたり^{注 13)}、「新兵舎地ノ南東地区」は 8 月 21 日に引渡す等¹⁴⁾、接收は土地と建物で分けて、段階的に進んだことがわかる。

廣田によると、キャンプ・クロフォードの建設に従事した占領軍の技術系将校は、当初4～5名、軍属の技術者は土木と建築が各1名で、種畜場の試験研究庁舎を建設本部として作業を進めた¹⁰⁾。また、顧問格の建設隊本部技師に元道庁技師の福岡五一^{注14)}が就いた。この事実は、占領軍が自らの設計基準に固執せずに「地理的条件を勘案」して地元の技術や経験を導入した証左といえる。こうした日本側の人的な技術協力は、他の占領軍工事に共通する対応である^{注15)}。

日本政府の特別建設出張所設置により、道庁には1946年5月19日、土木部に「特別建設事務所」が設けられた。その建築担当が廣田であった。また、10月の戦災復興院への一元化に伴い、「真駒内住宅兵舎関係工事は道庁が担当して居つたが十月一日中央命令に依り終戦連絡事務局にて担当して居つた接收家屋の改造工事に並に兵舎飛行場其の他の建設工事は中央に於ては復興院所管となり之が工事の実際担当は土木部が施行する」¹³⁾と道庁の業務も拡大した。

キャンプ・クロフォードの工事は1946年5月の測量に始まるが、DHの建設戸数は推計の約45%の210戸に減じた⁴⁵⁾。その理由は不明であるが、日本政府が物資不足を理由に宿舍数等の緩和を陳情し、5月18日に1946年の建設目標が1万戸に半減した影響と考えられる^{注16)}。但し、1946年12月末の全国のDHの戸数は3,172戸（新築1,200戸）、1947年3月末は6,800戸と推計され^{注17)}、建設目標が半減してもなお占領軍の要求の充足は困難であった。注目すべきは、この工事が5月13日の戦災復興院による「進駐軍用家族住宅設計図に関する件」の配布や日本政府のDH建設戸数の調整の最中に着手されたことで、占領軍がキャンプ・クロフォード建設を急いだことを示す。

2.2. キャンプ・クロフォードの用地選定とその背景

キャンプ・クロフォード（Fig.1）の用地となった種畜場は、開拓使のお雇い外国人エドウィン・ダン（Edwin Dun）の指導で開場し^{注18)}、札幌農学校（現北海道大学）附属農場等と並ぶ日本の近代農業を先導した重要な農場の一つであった。

その位置は札幌市の南方約4～6km、豊平川がなす扇状地の要付近で市街地から独立していた。地形は、東の右岸が2km程で丘陵地に

至る緩やかな傾斜地、西の左岸が藻岩山麓にかかる丘陵地である。また南北の起伏は小さいが、流路に従い南から北へ緩やかに低くなる微地形である。種畜場の主要機能は比較的平坦な右岸にあり、キャンプ・クロフォードの主な施設も右岸に設けられた。

郷土史から用地選定の経緯をおうと、札幌土建協会の技術担当で元道庁技師の吉田三郎平は、占領軍が駐留する豊平町月寒（現札幌市豊平区月寒）の旧日本陸軍師団司令部^{注19)}を訪問した際、新設基地の候補地として未開地の三角山付近に印がある地図を目にした。そこで吉田は1946年1月着任の占領軍のキャンプ設営担当者に、当地には人家や墓地があることを理由に^{注20)}真駒内の選定を進言した^{注21)}。この訪問との前後関係は不明ながら、道庁は種畜場が候補になるとその重要性に鑑みて月寒や三角山を代替地に示したというから、占領軍はこの3カ所から真駒内を選定したことになる。候補地が全て郊外であるのは、札幌市が非戦災都市の為、市街地やその周辺に十分な土地がなかった為と思われ、名古屋^{注22)}や神戸^{注23)}等の戦災都市で、市街地の焼け跡に基地を建設したと対照的である。

ここで、占領軍が真駒内を選定した背景を考えてみたい。まず占領軍と日本政府は、用地選定の検討項目を設けていた。例えば、前節で触れた「軍内指令」は、A位置、B建築形式、C配置、D建物の間隔、E厚生地域、F附属施設、G附帯施設の7項目、戦災復興院の「通牒」は「特に既設の道路、上下水道、電気、瓦斯等の諸施設の利用関係に十分留意されたい」³⁾と示し、これらが選定条件となった。

これに対し、廣田は建設を担当した第11空挺団がノースカロライナ出身の為、故郷の牧歌的風景を彷彿とさせる真駒内を選定し「コロニアルスタイルの一大基地を設営する夢を描いたのではなかったのであろうか」と推察する^{注24)}。しかし、札幌市近郊に牧歌的風景は多々あったはずで、感傷的な理由で決定したとは考え難い。

また、奥田二郎は、演習地と汚水処理、山紫水明⁸⁾を理由にあげる。つまり、訓練用の十分な用地と衛生、良好な居住環境を重視したとの理解である。確かに豊平川上流には江戸末期に開湯した定山溪温泉があるが大きな集落はなく、衛生と居住の面で良好な環境を求めた。さらに、占領軍はキャンプ・クロフォード建設の際に藻岩山麓で取水して上水を確保し、延長18kmの下水道を敷設して豊平川へ流したが、三角山付近と月寒にはこれに比肩する河川がない。

この他、工期短縮の可否も選定の一因と考えられる。占領軍は米ソ関係が「相当緊迫」していた為、1947年2月頃に「不急工事」を中止し^{注25)}、「純軍事的見地から重要と目される事業に全力が傾注」した。その一つが真駒内で、三沢や鹿屋と並び「大兵舎計画（約四、〇〇〇坪）実現の為、中央PDにより資材の急送が命ぜられた」喫緊の工事であった。特に全国の基地建設で「最も問題をおこしたものの一つに、資材問題」²⁾があったが、調達が優先されたことからその重要性が理解できる。つまり、占領軍には開墾済みの種畜場を接收することで、用地造成の手間を省く意図があったと思われる。後述の通り、実際の計画で占領軍は既存の農場施設や場内道路を活かしており、このことも工期短縮に寄与しただろう^{注26)}。なお、戦災／非戦災の違いこそあれ、市街の焼け跡（現白川公園）を用いた名古屋や琵琶湖を望む山麓の田畑を用いた大津市の皇子山ハイツ^{注27)}等も、造成済の用地を利用して建設した点が共通する。

Fig.1 Aerial View of Camp Crawford in Makomanai, Sapporo, 1948
(UR246_CA-134, 22 Apr. 1948 owned by Geospatial Information Authority of Japan)

3. キャンプ・クロフォード建設の組織と工事

本章では、キャンプ・クロフォード建設の組織を全国の動向と比較、整理した上で、工事の内容を追ってゆく。

3.1. キャンプ・クロフォード建設の組織

占領期の日本において、占領軍は接收施設の改修等、全国で多量の工事を発注した。当初、民間業者は独自に占領軍や戦災復興院と交渉して工事を受注していたが、その方法は徐々に体系化された^{注28)}。また、占領軍基地の建設も民間業者が受注して工事を進めた。

『占領軍調達史』によると³⁾、1946年4月29日の「家族住宅建設の請負業者選定に関する件」でDH建設を一任された日本政府は、この工事が「未経験の一大建設事業」で、直営による実施が難しい為、民間業者に協力を仰いだ。一方、民間業者の全国組織である日本建設工業統制組合は、基地建設が「一般復興工事に優先して実施される」と認識し、民間業者への発注を日本政府に陳情して受注の準備をしていた。また、同組合理事長の竹中藤右衛門らは、6月1日に特建協力会等を組織した^{注29)}。竹中は、当該工事を受注しなければ仕事がないとの危機感から、6月15日に「進駐軍宿舍建設について」と題する談話を発表し、「個々の業者との直接折衝を避けて、建設地方の実情に最も精通する当組合支部を活用」することを「本工事施工上の要諦」と訴えた。元々「連合軍用宿舍等建設要綱」は「施工は原則として請負…地方庁に於いて契約す。請負契約は随意契約」³⁾と記すから、業者間の競争を避ける狙いもあったと推察される。さらに、占領軍の工事は発注から着工までの期間が短く実質的に見積が不可能で入札の余裕がなかった²⁾ことも、民間業者の危機感の一因だろう。この様に、民間業者が占領軍工事を公平に受注し、共存共栄を図ろうとした^{注30)}ことは、戦後混乱期の建設工事の特徴の一つといえる。

キャンプ・クロフォード建設にあたり、道庁が特別建設事務所を設置した一方、民間業者は札幌土建協会の主導で、真駒内建設局（以下、真建）を組織した。真建には、伊藤組、大林組、川口組、木田組、菅原組、第一土建、大成建設、田中組、鉄道工業、成島組、廣野組が参加し、後に鹿島建設、清水建設、杉山建設、山田組等が加わった。真建は、設備業者を加えると40社近い組織で、最盛期の人員は170～180人、労働者は6,400人を数えたという^{注31)}。初代局長は伊藤組社長で貴族院議員等を歴任した伊藤豊次、1947年からは元道庁土木部長で田中組の宮崎正雄が就いた。つまり、キャンプ・クロフォードの建設は、竹中の訴えの通り、「地方の実情」に明るい人物を中心に、官民の組織を両輪に進んだ。

特筆すべきは、真建を窓口に一括して工事を受注して参加業者に配分したことで、「全国に例がないほどの成功」^{注33)}と評された。この方法はジョイント・ベンチャー方式（Joint Venture:JV）の萌芽といえよう。JV方式は1950年代の沖縄工事で始まり、1957年頃から「大規模工事に続々採用」されたから^{注32)}、真建は戦後一般化する施工方式を約10年先取りしたことになる。その中で全体の70%を担当したという^{注34)}大成建設の社史は、同社が真建設立を提唱し、全国のキャンプ工事に波及したとする^{注35)}。同社の提唱か否かは確認できないが、同じく工事を急いだ三沢基地の工事関係者が見学に訪れたというから^{注36)}、この方式が一定の影響をもったことは確かである。

3.2. キャンプ・クロフォードの建設工事

特別建設事務所と真建は、占領軍作成の1:3,000の配置図を元に1946年5月から測量と設計を進め、6月下旬から兵舎（Troop Housing:TH）、DHの順で建設したという。なお、英語表記のFig.2の

Table 2 Outline of Construction about Camp Crawford

Site Area (<i>tsubo</i>)	Const. Cost (JPY)	Const. Detail				
		Bldg. Num.	Area (<i>tsubo</i>)	Road	Sewer	Landscape
Total	480,000	1,212,000,000	471	43,748	25,444 m	19,307 m
D.H. Area	13,000	259,000,000	104	9,288	3,844 m	3,377 m
T.H. Area	350,000	953,000,000	367	34,460	21,600 m	15,930 m
Construction Period (original plan)		Start	3 Jun 1946	Completion	31 May 1947	about 1 year

1.This table is made by ref.13

下図は、縮尺に鑑み、この配置図と推察される。

『長官事務引継書』¹³⁾掲載のキャンプ・クロフォード建設の工事概要（Table 2）によると、工事はDH地区130,000坪に住宅を104棟（9,288坪）、TH地区350,000坪に兵舎を367棟（約34,460坪）を建設する計画で、各々の地区に道路、水道を敷設した他、造園工事や暖房、電気等の附帯工事もあった。また、工事には小型機の滑走路（延長700m）やゴルフ場の整備も含まれたと思われる。

公式の着工日は1946年6月3日、竣工目標は1947年5月31日であるから、工期約1年と急を要するものであった。また、占領軍はDHの工期を第1期35戸、第2期63戸と区切り¹³⁾、DHとTHの40%を1946年12月に使用できる様に厳命した。さらに、『長官事務引継書』に記される工事の進捗は、1947年2月¹²⁾に80%であるが、4月¹³⁾には65%に後退した。正確な竣工日は判然としないが、1947年7月や「秋」、「予定どおり22年末」¹⁰⁾等と着工から約1年2～6ヵ月程で完成したことになる。

ここで、工事が遅延した理由と、遅延しつつも比較的早く竣工してきた背景を検討する。まず、遅延は短い工期が最大の要因といえるが、人材不足もあった。例えば、1947年3月20日に札幌日僑勤労署の出張所が真駒内に開設され⁹⁾、校舎が接收されて授業が受けられない高校生の奉仕もあった^{注37)}。また、道庁では設備技師が不足し、南満洲鉄道に勤務していた引揚者が「暖房等の設備工事を主導」したという¹⁰⁾。北海道では戦前に満洲の採暖方法として壁式ベチカが導入され^{注38)}、戦後は引揚者の受入拠点となったから、専門知識を有する人材の確保も可能であったと想像される。なお、採暖方式について、当初、占領軍は電気暖房を要求したが、日本政府の陳情で1946年7月1日にガス、スチーム、電気が各々1/3になり、9月20日にガス16%、スチーム56%、電気28%となった²⁾。

暖房以外の寒冷地の仕様も工事遅延の一因といえる。廣田によると、軍用規格図集掲載のTHはツーバイフォー材の枠組にベニア板を張った仮設建築で¹⁰⁾、ベニアの厚さは1.5～2分²⁾であった。しかし、キャンプ・クロフォードでは「かなり本格的なものを要求」¹⁰⁾され、基礎はRC造、外壁は煉瓦であった。真偽は定かでないが、この特徴的な仕様はアイケルバーガー中将与建設担当の11空挺団司令官スイング少将が士官学校の同期という理由で容認されたという^{注39)}。なお、「設計が贅沢に過ぎると思われる事例」として日本政府がGHQにあってた陳情書に掲載した中で、青森のTHは、23℃の室温を保持する為、特別に作る必要のある4分厚のベニアにフェルトを貼った「寒地北海道よりも規格が高い」もので、岐阜の2重窓は「一寸勿体ないものと思われる」仕様²⁾と、他の都市にも特別な仕様が散見されるが、キャンプ・クロフォードの仕様は大きく異なった。

一方、工事が遅延しつつも比較的早く竣工した理由の一つは、2.2で触れた工事用資材の優先的な調達である。『占領軍調達史』によると、資材は日本政府が調達や配分する「宿舍（DH）工事用資材＝LD資材」と「軍需資材として占領軍から全部支給されるのが原則」

の「兵舎（TH）一般工事用資材＝PD資材」，「補給物資（補給部資材）」の3つがあり，PD資材は持ち出しもあったという^{注40)}。キャンプ・クロフォードでは1946年11月にセメント製造用石灰，12月4日にセメント，1947年5月19日に米軍供給の煉瓦を横浜から積出し小樽で荷揚げする等¹⁶⁾優先された。なお，敷地の東を走る私鉄である定山溪鉄道を工事に分岐して引込線を設けたことも特別な対応の一環といえよう^{注41)}。また，施工方法も一因で，民間業者は米軍貸与の重機を用いて工事を進めた¹⁰⁾。これは全国に共通し，業者は「米国流の最新施工技術や建設機械等に接するチャンスに恵まれ」^{注42)}，「土木工事の機械化のあけぼのをみた」^{注43)}と，戦後の施工技術に影響を及ぼした^{注44)}。

3.3. 「贅沢すぎる」キャンプ・クロフォード

アイケルバーガー中將がキャンプ・クロフォードを「贅沢すぎる」と評したことは郷土史が度々触れる事実である^{注45)}。何が贅沢かは整理が必要であるが，彼は1947年5月26日に現地を訪問しているから，発言はその時のものだろう。訪問に先立ち，担当部隊は自ら建設中の基礎を壊して土に埋め，完成予想の透視図を破棄したという。そして，完成した施設規模は当初計画より縮小した^{注46)}。理由は判然とせず想像の域に止まるが，11空挺団は第8軍司令部が承認した仕様を無断で変更して工事を進めたが，彼らの予想に反する訪問の一報を受けて事実を隠したのではないか。というのは，アイケルバーガー中將の札幌訪問の目的は，4月の選挙で初の公選知事に就いた社会党の田中敏文との面会だったからである^{注47)}。また，この顛末を踏まえると，『長官事務引継書』が記す工事進捗割合の後退にも説明がつく。

また，「贅沢」を理解する手がかりとして，まずDHの敷地規模に注目すると，キャンプ・クロフォードの1戸当りの面積1,700㎡は，設計標準600㎡の3倍近い。これは「設計が贅沢に過ぎると思われる事例」²⁾9つの中で最大で，2位の朝霞で1,330㎡と標準の2.2倍程度であった。次に工費に注目すると，真駒内の部隊規模は，1947年11月15日現在，東京のGHQを除く全国50のキャンプで14番目と⁷⁾決して大きくないが，工費121,200万円は，1946年12月16日現在「軍事施設で全国的に金のかかっているもの」23事例の最高額で，2位は春日原の73,600万円，3位は朝霞の67,900万円，最低は太田の5,000万円であるから群を抜いている³⁾。この内，福岡市南東約8kmの旧軍用地に建設した春日原は，近接する板付空軍基地（現福岡空港）の通信施設を持ち，キャンプ・クロフォードと同じくDHとTHの両地区を備えており（1972年返還），工費は60%程であるが，両地区を一体として開発したことが高騰の理由と思われる。但し，工費が嵩んだ要因は占領軍の工事発注方法にもあった。調達要求は「○○建設の整備拡張」等「漠然とした抽象的なもの」で，具体的な工事は現場責任者がその都度出す「作業命令書」で初めて明らかになり，「費用を考慮せず際限なく発出」された。よって，事前の工費を算定は不可能で「精算を行つてはじめて工事費の大きいのに一驚すること」も，むしろ一般的であつた^{注48)}。いずれにせよ，DHの敷地規模と工費の両面でキャンプ・クロフォードが目立っている。

4. キャンプ・クロフォードの空間構成と施設配置

本章では，北海道立文書館と札幌市公文書館が所蔵する配置図^{注49)}，国土地理院の空中写真からキャンプ・クロフォードの空間構成を整理し，「DH」やNARAの写真，『開拓使・北海道庁営繕80年の覚書き』

から施設配置を把握する。

4.1. キャンプ・クロフォードの空間構成

一般に，占領軍基地はDH地区とTH地区に大別できることは先に指摘した。両地区は独立する場合が多いが，岡山^{注50)}の様に接収住宅をDHに充てるだけの場合もあるし，部隊規模の大きな神戸には2つの独立したTH地区があつた⁷⁾。また，基地には占領軍の任務遂行と生活の便宜を整える為に「事務所，ホテル，モータープール，飛行場，専用道路，劇場，ゴルフ場，PX，教会，学校，病院，ペーカリー，ランドリー，専門電気，ガス，水道施設」²⁾等が設けられ，内田青蔵は一連の施設が揃ったDH地区を「小規模ながら一つの都市」^{注51)}と評し，占領軍基地が住宅地を超えた開発であることを示唆する。

これに対し，キャンプ・クロフォードは両地区一体の開発である点に特徴がある（Fig.2）。区画には番号が振られ，TH地区は100～2900（2000，2300，2600，2800は未確認），3700～4000の29区画，DH地区は3000から3600までの7区画がある。また，各施設には上1-2桁が地区番号に対応する3-4桁の施設番号が付された。

全体の空間構成を整理すると，まず主要施設は豊平川と定山溪鉄道の間に設けられた^{注52)}。このエリアは「く」の字状に南北に走るBASHORE ROADが全体を大きく東西に区分する。この道路とTHOMPSON STREET，JHONSTON ROADの3本は種畜場の道路であるから¹⁴⁾，占領軍は既存道路を計画の基準にしたといえる。また，BASHORE ROADの東は，定山溪鉄道から分岐する引込線が北のTH地区と南のDH地区に分けている。地形的に豊平川の影響でわずかながら南と東が高く，北と西が低いから，居住者の職位の高いDH地区がTH地区よりも高いことになる。一方，BASHORE ROADの西は，北から南の順に旧りんご園の②野球場（3700区，囲い数字はFig.2の施設に対応），旧採草場の⑤モータープール，真駒内神社のある日本人労働者居住地，RPE SHOP AREAと独身幹部宿舎（2200区）に分かれ，西には豊平川支流の真駒内川を跨ぐゴルフ場（2100区）や①テニスコート，滑走路（3800区）がある。この様に，高燥な東に執務中枢と居住の機能，河川に近い低地の西に生活施設と娯楽施設が配されている。

4.2. 宿舎（DH）地区の施設配置

DH地区（Fig.3）は南北最大約1,000m，東西最大約500mで，元は「一哩馬場」であつた。全体は西端のBASHORE ROADを基準に半円状に走るREID ROADと，それに交差するRANGEL ROAD，SKAU ROAD，KRAINS ROADの3本の曲線道路，定山溪鉄道と引込線で7区画に分かれる。道路はコンクリート舗装で，路側に雨水溝があり，歩道も設けられた（Fig.4）。中央の区画（3400区）を例に施設配置をみると，中央に①学校（3419）とそのグラウンドを兼ねた広場があり，20棟38戸のDHが十分な間隔を持って区画を圍繞している^{注53)}。DH周辺は芝で満たされ，歩道が各戸へ通じていた。

また，基本的に1戸建と2戸建のDHは独立しているが，RANGEL ROADとKRAINS ROADの中程にある2戸建1棟と4戸建2棟の各3棟は共有の中庭を囲んでいる。DHの並ぶ3100区（21棟37戸），3200区（22棟37戸），3500区（22棟65戸），3600区（5棟20戸）も概ね同様の配置である。複数の棟を組にして中庭を囲む配置は，“DH”が示す通り他の占領軍基地に共通し⁴⁻⁵⁾，3100区は5棟で1つ，3600区は5棟で2つという様に，組合せに変化がつけられた。但し，曲線道路を基準にした配置の為，接道と採光の方向は一定ではない。

なお、3300 区の定山溪鉄道と引込線に挟まれる北東角に使用人宿舎 ② (3300-3303) とボイラー室がある。他のボイラー室は 3000 区、3100 区、3500 区に、消防署③ (3526) とジープ車庫は 3500 区にある。

ところで、“DH”⁴⁵⁾ は“TYPICAL LAYOUT”と題する図と文章を掲載し、施設配置で考慮すべき 6 つの要点 (道路、レクリエーション地域、共同施設、居住地、ランドスケープ、歩廊) を示す。これらをキャンプ・クロフォードと比較すると、道路は地形に応じて曲線にすることという要点に準じているが、敷地は概ね平坦の為、地形をどう解釈したかは不明である。また、レクリエーション地域の内、野球場やテニスコート等規模の大きい広場は学校のグラウンドを兼ねること、共同施設の消防署は各施設に速やかに到着できる位置であること、雇用人宿舎やサービス機能は住宅と離して設置すること、ランドスケープは芝生と街路樹を備えることが要点で、いずれも準じている。一方、共同施設では劇場や PX、教会等の施設は駐車場と共に利便性の高い中央に配することとするが、学校と広場を除く施設を TH 地区に設けた点が異なる。

さらに、BASHORE ROAD に面する 1700 区と 2400 区が飛地であることも特徴で、前者は種畜場事務所 (現エドウィン・ダン記念館) を改修して⑤社交クラブとし、後者は④広場である。つまり、住宅は一つの空間として完結させたが、それ以外の施設は一体化に拘らず、点在する既存施設を柔軟に転用したのである。

4.3. 兵舎 (TH) 地区の施設配置

TH 地区は東西約 1,800m、東西約 1,300m で、東西の STREET と南北の AVE. が格子状の区画をなす。但し、元は採草場であった北西の

200 区が豊平川の流路の影響で角度が振れている様に、区画の方角や規模にはばらつきもある。道路の大半はアスファルト簡易舗装で、路側に雨水溝がある (Fig.5)。各区画には 1 中隊を単位に TH を配置する。具体的には平行配置の 24 人用の兵舎各 3 棟が食堂 1 棟と休養室 2 棟を挟んだ組を 1 単位とし、1 区画に 4 組を並べる (200, 800, 1000, 1100 区, Fig.2 右下)。しかし、TH の数が 4 棟の区画や東西が基本の TH の主軸が南北となる例外もある。

TH 以外の施設として、1400 区に①師団司令部 (1401) や②教会 (1403)、その北の 900 区に⑤体育館 (905)、④劇場 (907)、⑦図書館 (908)、⑥クラブ (909)、フットボールと野球の③グラウンド等がある。また、西の 1300 区に⑨ PX (1303, Fig.6) や⑩ペーカリー (1302)、⑪郵便局もある。これらは TH 地区の中心であり、キャンプ・クロフォード全体の機能的な中枢でもあった。また、南北に隣接する 2400 区と 2900 区の牛舎等、種畜場の転用施設があり、その詳細は石川らの報告に詳しい。但し、『旧真駒内施設接收関係』¹⁴⁾によると、接收時の種畜場施設は 140 棟であったが、1946 年度 34 棟、1947 年度 32 棟+サイロ 3 棟、1948 年度 18 棟と順次解体して 1950 年 1 月には 56 棟になり、接收解除時で 21 棟の施設が残存していた^{注 54)}。つまり、一部の既存施設は急を要する建設に役立てられたが、不要な施設は竣工後に整理された。なお、119 棟の内 96 棟は杉山組土建が取壊し、1947 年 5 月まで解体部材の一部は種畜場機能の移転先である新得町で「復旧工事用資材として」使用したという¹⁶⁾。

また、豊平川に近く敷地の低い BASHORE ROAD 西の 2200 区は、独身幹部宿舎の地区で、3 本の道路で囲まれる三角の敷地に木造住宅

Fig.2 "PLOT PLAN OF CAMP CRAWFORD SCALE=1/3,000"
(Author added informations from ref. 14, note 6 on the basemap (note 7) owned by Sapporo City Archive)

と食堂がある。さらに、隣接する 2100 区には大成建設が設計・施工したゴルフ場、⑮将校クラブ (2100)、④プール、①テニスコート等もある。ゴルフ場は北海道で唯一 18 ホールを備え、「真駒内基地の付属施設でみごとなのは米軍専用のゴルフ場である」⁸⁾と、米軍の遺産と位置づける向きもある。この他、種畜場の官舎等も確認できた。この様にキャンプ・クロフォードの施設配置は、場内道路や農場施設を活かしつつ、DH 地区と TH 地区を一体として計画された。

ちなみに、Fig.2 の 3700 区の西は旧集落の真駒内本町で、藻岩橋で豊平川を跨ぎ石山街道 (現国道 230 号) につづく。町名の通り、ここは真駒内発祥の地で、キャンプ・クロフォードの建設と共に人口が増加し、接收中には新鮮な野菜を求めに兵士らが訪れたという⁵⁵⁾。但し、計画時と判断できる縮尺 1:3000 の配置図 (Fig.2) と竣工間もない時期と判断できる配置図を比べると、前者は真駒内神社を含まないが後者は含んでいる。ここから真駒内神社自体は接收されなかったが、接收の範囲が変更したことがわかる。

5. キャンプ・クロフォードの建築

本章では、NARA 所蔵写真と『開拓使・道庁営繕 80 年の覚書き』から、個々の建築について整理する。NARA 所蔵写真は、撮影の年月日や都市名、施設名称等が記されている場合が多く、当時の状況を把握する上で有効である。但し、これまで建築の設計図書は見出せておらず、平面や断面、寸法等の情報は概要に止まる。

5.1. 宿舎 (DH) 地区の建築

一般に、DH には 1946 年 6 月に示された平家の A-1、A-2、B-1、

Fig.3 Aerial View of DH area and its around, 1948 (UR246_CA-135, 22 Apr. 1948 owned by Geospatial Information Authority of Japan)

Fig.4 Townscape of D.H. area (owned by City Archives of Sapporo)

Fig.5 Townscape of T.H. area (31 May 1951, owned by NARA)

B-2、C-1 の 5 つと、A-1a の様に A と B には小文字の「a」を付した 2 階建の 4 つの計 9 つの型がある^{3,5)} (Table 3)。1 戸の床面積は B-2a が最大、A-1 が最小で、A より B の方が居住者の職位が高く、C は多人数の家族用である。また、景観に変化をつける為⁵⁶⁾、2~4 戸の DH を組合せ、I 型や H 型等の多様な住棟を用意したことは小泉らが指摘する。また、2.1 で触れた「家族住宅計画一般仕様書」によると、住宅は木造平家か 2 階建て、屋根は「セメン葺」か厚型スレート葺、外壁はスタッコか下見板、床は「櫛縁甲板張」、内壁と天井は「テックス張 (一部プラスター仕上)」、台所その他に一部造り付物入戸棚を設けるのが共通の仕様である。しかし、「現地各部隊は当該建設地区に適合する設計」という様に、地域性による違いも認める³⁾。

キャンプ・クロフォードの DH については、廣田が平均面積や共通仕様、型について「10 タイプを超え」等と簡単に触れるが、個々の床面積、1 棟の戸数や棟数といった詳細は不明である。本稿では、接收解除時の DH の番号、構造、延床面積、壁の仕上げを示す「一覧」¹⁴⁾と、配置図や空中写真、真駒内団地建設時の土地区画整理図を照合し、7 つの型に準ずる平家と 2 階の 1、2、4 戸建の DH があることが把握できた (Table 4)。廣田によれば DH は木造在来構法で、大成建設と木田組を中心に施工された¹⁰⁾。また、写真から屋根は 4 戸建の住棟に寄棟が確認できるが、切妻が基本である。外壁は廣田がスタッコ、「一覧」はモルタルとするが、色は白、屋根は鉄板の瓦棒葺か一文字葺で緑のペンキが塗られていた⁵⁷⁾。「DH」の写真から「セメン葺」とはセメント葺瓦葺と理解できるが、キャンプ・クロフォードの DH の屋根が鉄板葺であるのは積雪寒冷地という「建設地区に適合」させた為だろう。一方、Fig.7 で判断する限り内装は一般仕様に準じていたと思われ、部屋の隅の管からスチーム暖房が備わっていたと判断できる。一般の日本人は立入禁止であったがときに見学が認められ、当時の日本人の生活水準を超えた機能や設備は「アメリカ村」や「白亜の城」⁵⁸⁾と呼ばれた。

水洗便所やスチーム暖房の設置は全国共通の仕様である。キャンプ・クロフォードでは石炭ボイラーによる集中暖房が導入されたが、これは 1946 年 4 月 1 日に第 8 軍司令部が示した「将校および家族宿

Table 3 Outline of DH, GHQ standard and Makomanai

Type	Stories	Rooms						Floor Area (tsubo)	No of Fam	Structure & Wall Finish
		L	D	BR	B	T				
A-1	1F	1	1	2	1	0	28.61	-	0	-
A-2	1F	1	1	3	1	0	30.66	30.94	15	W Mortar
A-1a	2F	1	0	2	1	0	27.36	27.36	74	W Mortar
A-2a	2F	1	1	3	1	0	32.40	32.50	34	W Mortar
B-1	1F	1	1	2	1	1	34.84	33.47	19	W Mortar
B-2	1F	1	1	3	1	1	37.18	-	0	-
B-1a	2F	1	1	2	1	1	38.23	38.52	22	W Mortar
B-2a	2F	1	1	3	1	1	46.52	46.25	20	W Mortar
C-1	1F	1	1	4	1	0	42.62	44.08	5	W Mortar

1. This table is made by ref.3 (p.45) and ref.14
2. in Rooms, L:living, D:dining, BR:bed, B:bath, K:kitchen and T:trunk
3. in Floor Area, left:GHQ's standard, right:Makomanai's for one family

Table 4 No. of each types

Type	Fam /Bldg	No of Bldg	Roof Type
A-2	1	15	G
A-1a	2	12	G
A-1a	4	7	G
A-2a	2	6	G
A-1a+A-2a	4	11	G
B-1	1	19	G
B-1a	4	2	G
B-2a	2	3	G
B-1a+B-2a	4	7	G+H
C-1	1	5	H

1. This table is made by ref.15
2. G: gable roof, H:hipped roof

Fig.6 P.X. and Troop Housings (16 May 1947, owned by NARA)

Fig.7 "In the Dependent Quarters" (25 May 1953, owned by NARA)

舎の修復復旧に関する仕様概要」が「L 中央暖房により室温七〇度 F に保ちうるようにすること」³⁾に準じたものだろう。『新札幌市史』⁹⁾によると、戦後の札幌市で最初に地域集中暖房が設けられたのは日本住宅公団による 1967 年 10 月の円山北町であるから、キャンプ・クロフォードの採暖方式は約 20 年早かったことになる。

この他、①学校 (3419) は木造 2 階建の 730 坪で、1947 年秋に竣工 (10 月 1 日開校)、9 学級約 450 人が学んだという⁸⁾。また、②使用人寄宿舍や③消防署 (3526)、ボイラー室、ジープ車庫も木造である。

5.2. 兵舎 (TH) 地区の建築

執務機能の内、①師団司令部 (1401) は、木造平家で白い外壁に上げ下げ窓を穿ち、瓦棒葺の寄棟屋根を載せる。平面は米国国防省を彷彿とさせる 1 辺 46.5m、梁間 11m の五角形である¹⁰⁾。当初は 2 階建で計画したが、3.2 で触れたアイケルバーガー中將の訪問で規模を縮小した。また、⑫屋内訓練場 (702, Fig.8) は、72×62m の平面で、旧日本軍美幌航空隊格納庫用の鉄骨を転用した。基本設計は福岡五一、施工は大林組である。元は北海道東部の積雪の少ない地域の仕様の為、札幌の気候を考慮して補強したが、1955 年の豪雪で崩壊したという¹⁰⁾。内部は、冬季の訓練を念頭に土間とした。

生活を補完する機能の内、②教会 (1403 Fig.9) は梁間 11.8m、軒高 8.5m のラテン十字の平面である。特別建設局では設計できなかった為、施工業者に内定済であった大成建設本社の「古典建築に明るい」人物に依頼したという。正面は尖頭アーチ、その両側の対になったジャイアントオーダー、破れ破風という印象的な構成であるが、洗練された意匠とは言い難い。また、⑨PX (1301) は、白い壁に瓦棒葺の屋根を載せたコの字型平面である。購買機能の他にスナック・バーを併設し、防犯上の配慮と思われる窓格子を備える。

⑦図書館 (908) は下見板の外壁に上げ下げ窓を穿ち、瓦棒葺の切妻屋根が載る桁行 34.5m、梁間 9m の T 字型平面で、高い天井の明るい開架閲覧室を持つ (Fig.10)。また、④劇場 (907, Fig.11) と⑤屋内運動場 (702) は、札幌近郊 (現札幌市東区) の丘珠航空隊格納庫の材料を転用して建設した¹⁰⁾。前者はアール・デコ調の正面で、1 階 840 席、2 階 270 席を持つ。後者は軒にトップライト、両側に 7 つのドーマ窓を持ち、1 階にプールと小アリーナ、2 階に大アリーナがある。

この他、職位に応じたクラブもあった。その一つが種畜場最大で 1937 年建設の牛舎を転用した⑥クラブ (1404, Fig.12) である。腰折

屋根と切妻屋根の 2 棟が L 字に交差し、石造サイロを併設する。2 階は卓球やビリヤード等の娯楽施設で、ドーマ窓から十分な採光を確保する。また、手動式のボーリング場もある^{注 59)}。設計は福岡五一で、サイロは展望台になり、天井は船底、床はフローリングにボックス席を並べたバーを持った (Fig.13)。また、⑭下士官クラブ (1703) は、大きな切妻屋根を持つハーフティンバーの建物で、内部には中央を折り上げ、白い合板と濃い色の木材による格子天井のバースペースがある。さらに、将校クラブ (施設番号不明) はステージを持つ天井の高いホールやカウンター付きの食堂を持つ他、壁は白く大きな開口で明るく、暖炉付きの重厚な造作の部屋もある (Fig.14)。

最後に、既に触れた通り TH は木造ながら外壁に煉瓦を用いる。屋根は鉄板一文字葺の切妻で、外壁に特徴があるが、内部は合板張の簡素な仕上である (Fig.15)。なお、確認し得る限り DH 地区、TH 地区共に施設の窓は 2 重で地域性が考慮された仕様といえる。

この様に、占領軍は様々な機能の施設を設けたが、全施設を新築したのではなく既存の施設や材料を活かした。また、寒冷地という地域性を考慮した仕様も確認できた。この様にキャンプ・クロフォードは多様な機能を備えていたが、個々の施設の仕様は必ずしも贅沢とはいえず、一時利用を前提としたキャンプを体現していた。

6. 竣工以降のキャンプクロフォードの変容と位置づけ

本章では、キャンプ・クロフォードの竣工から接収解除後の変化を概観し、本稿の要点をまとめてむすびとしたい。

竣工から約 1 年半後の 1948 年 6 月 12 日、全国で「従来にも増して家屋の必要にせまられ」^{注 60)}、キャンプ・クロフォードでは 1949 年に 30 棟 60 戸程を増築した。その後、1950 年 6 月に朝鮮戦争が勃発すると、1～2 年の間に DH や TH がさらに増設された。また、朝鮮戦争で部隊の交替が相次ぎ、9 月には警察予備隊が入る等した。

その後、1954 年 6 月の朝鮮戦争休止による占領軍の引揚げに伴い 1955 年 3 月 31 日の TH 地区から段階的に接収が解除され、1959 年 12 月 14 日に完了した^{注 61)}。跡地は、北の一部が陸上自衛隊真駒内駐屯地、DH 地区が警察学校、他は道営真駒内団地となったが、ゴルフ場はそのまま用いられた。1959～1965 年に開発された真駒内団地は、戦後の人口増加と住宅難を背景とした札幌の郊外開発で最初期のものである。札幌市は 1950 年代半ばに「グレートサッポロ」という都

Fig.8 "Field House"
(16 May 1947, owned by NARA)

Fig.9 "Post Chapel"
(31 May 1951, owned by NARA)

Fig.10 "The Post Theater"
(21 Oct. 1947, owned by NARA)

Fig.11 Post Library
(21 Oct. 1947, owned by NARA)

Fig.12 "The Enlisted Men's Club"
(16 May 1947, owned by NARA)

Fig.13 "The Lower Four Grade Enlisted Club"
(31 May 1951, owned by NARA)

Fig.14 "The First Three Grades Club"
(21 Oct. 1947, owned by NARA)

Fig.15 "The New Co. "K" Barracks"
(16 May 1947, owned by NARA)

市建設を目標に掲げたが停滞していた。そこで、急速な都市膨張を受けて1960年に「主要事業一〇計画」を策定した^{注62)}。札幌市では1963年に15,300戸の住宅が不足し、人口は1960年に50万、1970年に100万人を超えた。1961年5月、豊平町は札幌市に合併するが、こうした状況下で、5,000戸、20,000人の計画規模の真駒内団地が都市施策に果たした役割は小さくなかったと思われる^{注63)}。なお、マスタープランは東京大学の高山英華研究室が作成し、幼稚園を単位としたコミュニティを計画した点に特徴がある。

その後、1966年4月に1972年冬季五輪が決定すると、DH地区は選手村となり、ゴルフ場には競技施設が建設された。大会後、選手村は真駒内団地の一部をなし、冬季五輪に併せて開通した地下鉄駅、南区役所やショッピングセンター等からなる中核地区、ゴルフ場は真駒内公園となり現在に至る。また、石炭暖房による公害問題を背景に、地域暖房のボイラープラントが南区役所の隣に建設され一帯に供給された。結果、『新北海道史』が「郊外に新しい都市が出現した」と記す様に、施設こそ更新されたが住宅地の性格は失わなかった上、「小規模ながら一つの都市」という占領軍基地の性格をも受け継いだ。戦災都市の中心部を占めた占領軍基地の跡地利用と比較すると、例えば横浜市は防火建築帯^{注64)}、名古屋は都市公園、神戸は市街地となっており、占領軍基地が戦後の都市再開発に結びついた点で共通するが、旧来の機能の継続性という点で札幌市は異なる。

最後に、本稿の要点を4点にまとめ、むすびとする。第1に用地選定と立地条件で、占領軍は市街地から独立し、居住環境と衛生条件の良好な札幌近郊の旧農場を接收してキャンプ・クロフォードを新設した。用地が郊外だったのは、札幌市が非戦災都市だったためもあった。また、米ソ関係の緊張状態を背景に早期の竣工を求める中、開墾済の用地は造成の手間を省くのに有効で、既存の農場施設や場内道路の利活用も有効に働いた。

第2に建設組織と工事で、建設工事を民間業者が請負ったのは全国に共通するが、地元業者を中心に施工組織を設立して一括で建設を請負うというJVを彷彿とさせる独特の方法を採った。また、短い工期や人材不足、高い仕様要求が理由で工事は遅れたが、資材の優先的な調達で比較的早期に竣工することができた。さらに、キャンプ・クロフォードは占領軍全体の責任者をして「贅沢すぎる」と評し、工費とDHの敷地規模が全国最大である点にそのことが窺えた。

第3に空間構成と施設配置で、キャンプ・クロフォードは地形に即して高燥の東にDHとTHの両地区、豊平川に近い西がそれを補完する地区であった。DHは占領軍が示す要点に準じた構成である。一方、THは既存の場内道路を基準に格子状に区画した上で施設を規則的に配した。要点に準じたDHの施設配置や既存施設の転用は、全国の占領軍基地に共通するが、DH地区とTH地区を一体として開発し、柔軟な対応で全体として必要施設を充足する点に独自性がある。

第4に建築で、キャンプ・クロフォードには全国の占領軍基地と同様に一つの都市をなす様な施設があった。また、当時の日本人の生活水準に照らせば機能や設備、仕様は充実していたが、基本的な材料や意匠は標準的で、旧日本軍施設の材料、旧農場施設も転用する等、必ずしも贅沢ではなかった。それは、一時利用を前提としたキャンプ(＝基地)を体现していた。

この様に、未開地であった真駒内は、戦前に日本の近代農業を先導する農場として開発されたが、キャンプ・クロフォード建設によっ

て一種の都市機能を有する住宅地として開発された。接收解除後の再開発で札幌市の主要な郊外の一つとなったが、その素地は、占領軍による強制的な基地開発によって整えられた。しかし、その検討には占領期札幌の包括的な把握が必要で、今後の課題としたい。

謝辞

本稿執筆にあたり、北海道立文書館、北海道立図書館、札幌市公文書館、札幌市中央図書館、北海道大学附属図書館、国立公文書館、外務省外交史料館にお世話になりました。記して深甚なる感謝を申し上げます。なお、本稿はJSPS科研費JP26249086(研究代表者：大場修)、JP19H02332(研究代表者：角哲)の成果の一部です。

参考文献

- 1) Kaku, S., Oba, O., Tamada, H., Sunamoto, F., Murakami, S., Osada, J.: A historical study on types and trends of allied buildings by GHQ in Sapporo, Hokkaido, Summaries of Technical Papers of Annual Meeting, Architectural Institute of Japan, History and Theory of Architecture, pp. 919-920, 2016. 7 (in Japanese)
角哲・大場修・玉田浩之・砂本文彦・村上しほり・長田城治：北海道札幌市における進駐軍接收施設の種類の傾向について 占領下日本の都市・住宅に関する研究 その6、日本建築学会大会学術講演梗概集建築歴史・意匠、pp. 919-920, 2016. 7
- 2) The editorial com. for the history of occupation army's procurement: The history of occupation army's procurement -key of occupation army's procurement-, research section of general affairs dept. of public procurement service, 1956 (in Japanese)
占領軍調達史編さん委員会：占領軍調達史 - 占領軍調達の基調 -、調達庁総務部調査課、1956
- 3) The editorial com. for the history of occupation army's procurement: The history of occupation army's procurement -about construction-, research section of general affairs dept. of public procurement service, 1959 (in Japanese)
占領軍調達史編さん委員会：占領軍調達史 部門編 - 工事 -、調達庁総務部調査課、1959
- 4) Engineer Section FEC: Dependents Housing Japan & Korea, published year unknown
- 5) Japanese Staff-Design Branch OCE GHQ AFPAC Industrial Arts Institute-Ministry of Commerce and Industry: Dependents Housing Japan & Korea, Gizyutsu Siryo Kankokai, 1948
- 6) Sunamoto, F., Oba, S., Tamada, H., Kaku, S., Osada, J. and Murakami, S.: A study on condition of procurement of Miyajima hotel (tax training center, Hiroshima branch), AIJ Journal of Technology and Design, no. 62, pp. 383-388, 2020. 2 (in Japanese)
砂本文彦・大場修・玉田浩之・角哲・長田城治・村上しほり：宮島ホテル(税務講習所広島支所)の接收と取り扱いについて、日本建築学会技術報告集 62号, pp. 383-388, 2020. 2
- 7) Murakami, S., Oba, O., Sunamoto, F., Tamada, H., Kaku, S. and Osada, J.: The aspect of dependent housing and military dispositions in the occupied Japan, Journal of Architecture and Planning (Transactions of AIJ), no. 739, pp. 2441-2450, 2017. 9 (in Japanese)
村上しほり・大場修・砂本文彦・玉田浩之・角哲・長田城治：占領下日本における部隊配置と占領軍家族住宅の様相、日本建築学会計画系論文集 739号, pp. 2441-2450, 2017. 9
- 8) Okuda, J.: U.S. army's history in Hokkaido, 1961 (in Japanese)
奥田二郎：北海道米軍太平記 黒と赤の日誌、1961
- 9) Board of education, Sapporo: New history of Sapporo vol.5 common view 5-1, Sapporo city, 2002 (in Japanese)
札幌市教育委員会：新札幌市史 第五巻 通史五(上)、札幌市、2002
- 10) Hirota, M.: The note for the building and repair section of Kaitakushi and Hokkaido gov., Do-Sekkei, Co.Ltd., 1997
越野武、角幸博監修、廣田基彦：開拓使・道庁営繕 80年の覚書き、北海道建築設計監理株式会社、1997
- 11) Hokkaido government: New history of Hokkaido vol.6 common view 5, Hokkaido prefecture, 1977 (in Japanese)
北海道：新北海道史 第六巻 通説五、北海道、1977.
- 12) Hokkaido govt.: The documents for director general's succession of affairs, owned by The Archives of Hokkaido, 1946. 2 (in Japanese)
北海道庁：昭和二十二年二月長官事務引継 其の一、北海道立文書館蔵、1947. 2
- 13) Hokkaido govt.: The documents for director general's succession of affairs, owned

- by The Archives of Hokkaido, 1946. 4 (in Japanese)
北海道廳: 昭和二十二年四月長官事務引継書, 北海道立文書館蔵, 1947.4
- 14) Hokkaido govt.: The reference for requisition of old Makomanai facilities, owned by The Archives of Hokkaido, 1946-1954 (in Japanese)
北海道庁: 旧真駒内施設接収関係, 北海道立文書館蔵, 1946-1954
- 15) The general affairs div. of minister's secretariat: About construction of allied forces, owned by Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan, 1945. 9-1949. 3 (in Japanese)
大臣官房総務課: 連合軍に関する設営関係雑件, 外務省外交史料館蔵, 1945. 11-1949. 3
- 16) The general affairs div. of minister's secretariat: About construction of allied forces, owned by Diplomatic Archives of the Ministry of Foreign Affairs of Japan, 1945. 9-1950. 5 (in Japanese)
大臣官房総務課: 連合軍に関する建設関係, 外務省外交史料館蔵, 1945.9-1950.5

注

- 注 1) 秋尾沙戸子: ワシントンハイツ GHQ が東京に刻んだ戦後, 新潮社, 2011 等
注 2) 小泉和子, 高敷昭, 内田青蔵: 占領軍住宅の記録 (上) 日本の生活スタイルの原点となったディペンデントハウス, 住まいの図書出版局, 1999
注 3) 本稿は文献 1 の一部を大幅に加筆し, 修正したものである。
注 4) 喜田信代, 羽深久夫: キャンプ・クロフォード (米軍真駒内基地) の兵舎建築について, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.443-445, 1998.7 や喜田信代, 本間博文, 羽深久夫: キャンプ・クロフォード (占領軍真駒内基地) の建設概要について, 日本建築学会北海道支部研究報告集 No.70, pp.645-648, 1997.3 があり, 前者は実測調査, 後者は聞き取り調査が主の報告である。
注 5) 石川洋介・角幸博・小澤丈夫・石本正明による北海道真駒内種畜場における GHQ 接収施設の使用・解体について, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.399-400, 2011.7 と北海道における GHQ の接収・返還過程について, 日本建築学会北海道支部研究報告集 No.84, pp.663-666, 2011.7 があり, 前者は転用された種畜場施設, 後者は北海道全域の接収施設を俯瞰する中でキャンプ・クロフォード全体の概要に触れている。
注 6) 「米軍駐留時代の真駒内 (昭和 25 年) 縮尺: 1/6000」(請求番号 297)
注 7) 「PLOT PLAN OF CAMP CRAWFORD SCALE=1/3,000」(同 1454)
注 8) 本稿では主に UR246_CA-134 と UR246_CA-135 (1948.4.22 撮影), MHO-61-3B_C7-896 (1961.6.2 撮影), MHO-61-3B_C8-225 (1961.5.26 撮影) の 4 枚を用いた。
注 9) NARA で RG:SC111 所収の札幌関連の写真収集した。
注 10) 神奈川県立川崎図書館の社史コーナーを中心に, 1945 年の工事受注額上位 30 社の建設業会社史を中心に関連資料を閲覧した。
注 11) 詳細は文献 2, p.199-203。
注 12) 文献 8, pp.117-119, 千歳市史編さん委員会: 増補千歳市史, 千歳市, 1983 等
注 13) 14 戸 58 人のスタッフのうち 10 戸 38 人は立退の必要があることが窺える。
注 14) 福岡は, 北海道の技師で 1934 年 6 月に「北海道の建物の姿」(『建築雑誌』1934.9) と題した講演, 占領軍が接収した札幌グランドホテルの設計 (1939) の他, 1940 年 9 月に落藤藤吉や吉田三郎平らと北海道建築協会を設立して機関誌『北海道建築』を刊行し, モデル寒地住宅建設 (1941) や農家住宅設計協議 (1942) を実施する等, 戦前の業界で重要な役割を担っていた。
注 15) 角哲, 大場修, 砂本文彦, 玉田浩之, 村上しほり, 長田城治: 日本の建設業会社史にみる占領期の設計・施工業務に関する試論, 日本建築学会北海道支部研究報告集, pp.515-518, 2018.6 で, 日建設計や横河工務所が 1950 年代に設計協力していることを把握した。
注 16) 政府の占領軍への陳情の詳細については文献 2, pp.180-191
注 17) この推計は「仙台特別建設出張所支部設置の件」(1946.4.19), 文献 16, p.77, 80
注 18) 北海道庁: 北海道庁種畜場沿革誌, 北海道庁, 1900 等
注 19) 豊平町月寒には 1896 年設置の第 7 師団の施設があり, 沿革は豊平町史編さん委員会: 豊平町史, 豊平町役場, pp.322-334, 1959, 等。
注 20) 北海道建設新聞社: 風雪の百年ー北海道建設業界史ー, 北海道建設新聞社, p.224, 1970
注 21) 札幌建設業協会創立 100 周年記念事業実行委員会記念誌編集部会: 札幌建設業協会 100 年史, 札幌建設業協会, p.69, 2016. この他, 文献 10, p.204 等。
注 22) 角哲, 大場治, 村上しほり, 砂本文彦, 玉田浩之, 長田城治: 名古屋市中における占領軍家族住宅の施設の種類の配置, 日本建築学会北海道支部研究報告集, pp.407-410, 2019.6
注 23) 村上しほり: 神戸 闇市からの復興 占領下にせめぎあう都市空間, 慶應義塾大学出版会, 2018
注 24) 谷代久恵: 真駒内物語, 北海道新聞社, 2002, p.86 にも廣田の推察を踏まえた記述がある。

- 注 25) 三沢は飛行場と DH100 戸, 鹿屋の飛行場。
注 26) 前掲占領軍住宅の記録 (上), pp.84-85 で, 東京のグランドハイツ (成増地区) の中央の道路を旧日本軍の滑走路を活かしたものと推察している。
注 27) 玉田浩之, 大場修, 砂本文彦, 角哲, 村上しほり, 長田城治: 占領軍家族住宅「皇子山ハイツ」の建設経緯と跡地利用 占領下日本の都市・築に関する研究 その 8, 日本建築学会大会学術講演梗概集, pp.923-924, 2016.8
注 28) 土木工業協会, 電力建設業協会: 日本土木建設業史, ㈱三秀舎, p.402, 1971
注 29) 前掲日本土木建設業史, p.402 では, 合理化を目的に占領軍, 戦災復興院の勧めで「特建技術団 (Architectural Engineering Company) という任意団体を組織したという (1947.5.31 解散)。
注 30) 前掲日本の建設業会社史にみる占領期の設計・施工業務に関する試論
注 31) 前掲札幌建設業協会 100 年史, pp.69-70
注 32) 前掲日本土木建設業史, p.461
注 33) 前掲札幌建設業協会 100 年史, p.70. 同様の指摘は, 北海道建設業協会 100 年史編集委員会: 北海道建設業協会 100 年史, 北海道建設業協会, p.76, 2016 等。
注 34) 北海道とともに百年ー大成建設株式会社, 大成建設株式会社, p.33. なお, 1947 年 9 月刊行の小島國平: 札幌商工案内, 札幌商工案内, 1947 に「大成建設株式会社札幌支店」の協賛広告 (p.134) があり, 住所を「札幌郡豊平町字真駒内」と記すから, 同社が当該工事を重視していたと理解できる。
注 35) 社史発行準備委員会: 大成建設社史, 大成建設株式会社, p.436, 1963
注 36) 前掲風雪の百年ー北海道建設業界史ー, 北海道建設新聞社, p.225, 1970
注 37) この他, 前掲真駒内物語, p.100 等
注 38) 遠藤明久: 北海道住宅史話 (下), 住まいの図書出版局, pp.29-41, 1994
注 39) 前掲の真駒内物語, pp.93-97
注 40) 持ち出しが必要なのは, 工期に照らし, 支給が間に合わない為であった。
注 41) なお, 引込線は建設工事完了後に撤去の予定であったが継続利用された。
注 42) 前掲日本土木建設業史, p.403
注 43) 前掲風雪の百年ー北海道建設業界史ー, p.260
注 44) この他, 村松貞次郎: 日本近代建築技術史, ㈱彰国社, 1976, pp.175-176 が, 「戦後の建築施工術のもっとも大きな特徴は ... 目ざましい機械化の進展である。それらの契機としては, 1) 占領軍基地等の工事でアメリカ貸与の近代的な建設機械の操作に習熟したこと」と記す様に, 共通認識といえる。
注 45) 文献 8, 10 の他, 札幌市史編さん委員会: 札幌百年のあゆみ, 札幌市, p.448, 1970 等
注 46) 文献 8, 10, 奥田二郎: 道政風雲録ー戦後十年ー, 双樹社, p.77, 1959 等
注 47) 高橋昭夫: 証言 北海道戦後史 田中道政とその時代, 北海道新聞社, p.152, 1982
注 48) 文献 2, p.206. 占領軍としては, 兵舎や飛行場が作戦上重要な為, 設計や施工, 竣工検査を詳かにしなかったという。
注 49) 主に注 6 と注 7, 文献 14 所収 "CAMP CRAWFORD JAP 253" を参照した。
注 50) 砂本文彦, 大場修, 玉田浩之, 角哲, 長田城治, 村上しほり: 占領期岡山における接収住宅に関する研究, 日本建築学会中国支部研究報告集, pp.945-948, 2016.3 等
注 51) 前掲占領軍住宅の記録 (上), p.74
注 52) 定山溪鉄道東の丘陵地は油槽等の附属施設用地, DH 地区の南は演習地であったが, 本稿では割愛した。
注 53) 本稿では, 注 8 の空中写真, 注 68 の配置図の他, 北海道立文書館所蔵の北海道庁: 昭和三十三年度 旧真駒内種畜場財産返還関係 (A11-3/505) 所収の接収解除時のリスト, 土地区画整理事業認可申請 (A11-3/1033) の「設計変更図」(1966.3.10) を元に当初計画の竣工時までの棟数と戸数を判断したため, 資料の作成年や種類によって増減があることを付言しておく。
注 54) なお, 解体建物 119 棟のうち 96 棟は杉山組, 23 棟は軍が取壊した。また, 郷土史真駒内編纂委員会: 郷土史真駒内, 郷土史真駒内編纂委員会, 1977 は「21 棟を残して取り壊されてしまい」p.55 と記す。
注 55) 前掲真駒内物語, p.112
注 56) 前掲占領軍住宅の記録 (上), p.130
注 57) 真駒内街路灯組合編: 真駒内団地史 街路灯と地域の歩み, p.7, 2016
注 58) 高橋昭夫: 証言 北海道戦後史 - 田中道政とその時代 -, 北海道新聞社, pp.74-75, 1982
注 59) 倉島齊: わたしの戦後体験 米軍基地キャンプ・クロフォード, 「新札幌市史」機関紙 札幌の歴史第 41 号, 札幌市教育委員会文化資料室, pp.40-47, 2001
注 60) 個人住宅関係, H.2.1.0.4 連合軍による土地建物その他の接収及び解除関係 (第一巻), pp.57-58
注 61) 前掲真駒内団地史 街路灯と地域の歩み, pp.7-9
注 62) この計画は, 後に見直されて 1965 年に「札幌建設六年計画」, 冬季五輪開催決定に伴い 1966 年に「札幌建設五年計画」となった。
注 63) 1975 年の居住人口は 25,280 人と計画人口を超えていた。
注 64) 木島繁治: 接収解除の歩み, 横浜市総務局渉外部, 1997 等

A HISTORICAL STUDY ON CONSTRUCTION PROCESS AND ITS FEATURES OF CAMP CRAWFORD ON GHQ'S OCCUPIED DAY IN SAPPORO

Satoru KAKU^{*1}, *Osamu OBA*^{*2}, *Fumihiko SUNAMOTO*^{*3},
Hiroyuki TAMADA^{*4}, *Shihori MURAKAMI*^{*5} and *Joji OSADA*^{*6}

^{*1} Assoc. Prof., Graduate School of Design and Architecture, Nagoya City Univ., Ph.D.

^{*2} Prof., Faculty of Life and Environmental Sciences, Kyoto Prefectural Univ., Dr.Eng.

^{*3} Prof., Faculty of Home Economics, Kobe Women's Univ., Dr.Eng.

^{*4} Assoc. Prof., Faculty of Media and Arts, Otemae Univ., Ph.D.

^{*5} Visiting Researcher, Graduate School of Human Life Science, Osaka City Univ., Ph.D.

^{*6} Lect., Dept. of Human Life Studies, Koriyama Women's Univ., Dr.Eng.

keywords: After World War II, Hokkaido Prefecture, Sapporo, GHQ, occupied and Camp Crawford

The purpose of this article is to clarify the construction process and features of Camp Crawford in Makomanai, Sapporo. It was named after Joseph Ury Crawford, advisor and U.S. railway engineer of the Hokkaido development commission (Kaitakushi). Upon the occupation of Japan, the general headquarters (GHQ) set the 9th corps, 8th army's headquarters in Sapporo, chosen primarily because of Hokkaido's location. Several notable cities in Japan were war damaged, hence had little facility stocks. Sapporo, on the other hand, was intact and had enough supplies. These were essential aspects in establishing the headquarters in Sapporo.

GHQ ordered the Japanese government to construct 20,000 dependent housings (DH) in March 1946. This proved difficult because building materials were scarce, so some construction projects were stopped. However, deemed by the government as essential in the Cold War due to its strategic location, Camp Crawford's construction continued and was erected quickly in Sapporo.

GHQ appropriated the land of the Hokkaido Animal Husbandry Experimental Station Makomanai as the site. It was located south of Sapporo's city center, about 4-6 kilometers away, upstream of Toyohira river. Jozankei railways was at the eastern side. These proved valuable to maintaining good living conditions and sanitation. Also, beneficial for swift construction.

Private contractors organized a special union to construct the new camp. The union received the contract as a single unit. This approach was outstanding at that time since it can be recognized as the initial stages of a joint venture (JV) agreement. The JV was definitively established during the 1950's in Japan. Construction was delayed but eventually completed as supply of building materials for this particular camp was a priority. 8th army head Eichelberger evaluated it as "too expensive." Consider though, that the camp had several facilities and covered a vast plot of land. Also, the land area for one DH was the largest among all camps in Japan.

The DH and troop housing (TH) were developed concurrently, a unique feature here since, typically in GHQ's camps across Japan, these would be built separately. This camp's site plan was influenced by topography and old facilities. TH and DH areas were situated in the eastern part of the site where it was dry and higher than the west. The service facilities were on the west amidst gently rolling terrain. TH was on the upper section of the site's eastern part, laid out on a grid using the old farm road. Below it, the DH was arranged on curved roads, following GHQ standard. Several facilities were added, making the camp almost a small city.

TH area had, among others, an office, PX, bakery, church, theater, clubs, library, gym, sports grounds, and golf link. DH area had detached and row houses using GHQ standards, except for the roof material. Instead, the roof was finished with sheet iron, characteristic of the cold region, and contributing to high costs. However, the GHQ used existing facilities and new buildings were simple. The camp was generally using excellent specifications when compared to Japanese buildings at that time.

After derequisition, late 1950's, the site was transformed to the Japan Self-Defense Force Base and a prefectural residential area, Makomanai Danchi. The DH area was once used as Olympic village, the golf link for stadiums. Camp Crawford is the foundation of present residential suburbs.

(2020年4月10日原稿受理, 2020年11月2日採用決定)